

■研究ノート

古代「えみし」の系統的な位置付けとその成立期

女鹿 潤哉 (学芸員)

1 エミシと「えみし」(はじめに)

古代の日本が編纂した歴史書によれば、岩手県を含む東北地方北半から北海道南西部(以下、道南西部と表記)などにかけて、蝦夷などと記された人々が住み、日本の支配にあるいは抵抗し、あるいは服従したとされます。今日の歴史認識では、一般に蝦夷はエミシと読み、先に述べた人々についてもエミシと呼んできています。

しかし、『釈日本紀』『伊呂波字類抄』などの史料から、奈良・平安時代には、蝦夷などの読みは、実はエビスだったことが知られています。一方、『日本書紀』神武天皇即位前紀は、現在の奈良県にあって朝廷側に敵対して討たれた人々を愛彌詩(読みはエミシ)と記しています。また、エミシは、古墳時代末～平安時代前期、毛人や蝦蟇などの用字によって、しばしば人物の名として登場し、それは貴族から庶民、さらに賤民の階層にまでわたっているのです。

エミシは、元来、勇敢なことを意味することばに由来するのに対し、エビスは、日本の支配に従わない東北北半や道南西部などの人々を、野蛮な異民族とみなす差別意識に基づく呼称と考えます。「えみし」に対するエビス認識は、7世紀後半に中国唐の制度にならって誕生する律令国家日本側の中華意識を背景とし、蝦夷の用字と結びつく形で成立したと理解されます。

この小論では、古代の東北北半から道南西部などにわたった在地的人々を「えみし」と記し、エミシ・エビスは「えみし」に対する日本側の呼称や認識を示すものとし、また、およそ、10世紀後半～12世紀(王朝期)を含む中世の「えぞ」とエゾについても書き分けが必要でしょう。

2 「共通文化圏」と「拡大文化圏」

筆者は、本誌No.82(1999年7月)でも述べたように、「えみし」を単に古代史上の問題としてとらえるのではなく、どのよ

うな人々に起源し、歴史的にどのような人々に連なっているのかという系統的な理解が重要だと考えます。

東北北半(特に北部)から道南西部(特に南部)にかけての地域は、ほぼ縄文時代早期～弥生時代中期(およそ9000～2000年前)、土器の様式や道具を始めとする生活・文化の面で、共通性が強い文化圏(以下、共通文化圏と表記)を構成してきました。ところが、弥生時代後期(およそ2000～1700年前)にはいると、東北地方全域には、天王山式土器に伴う文化(以下、天王山文化と表記)が広がります。すると、それまで東北地方の各地にみられた地域的な特色は失われる傾向を示します。

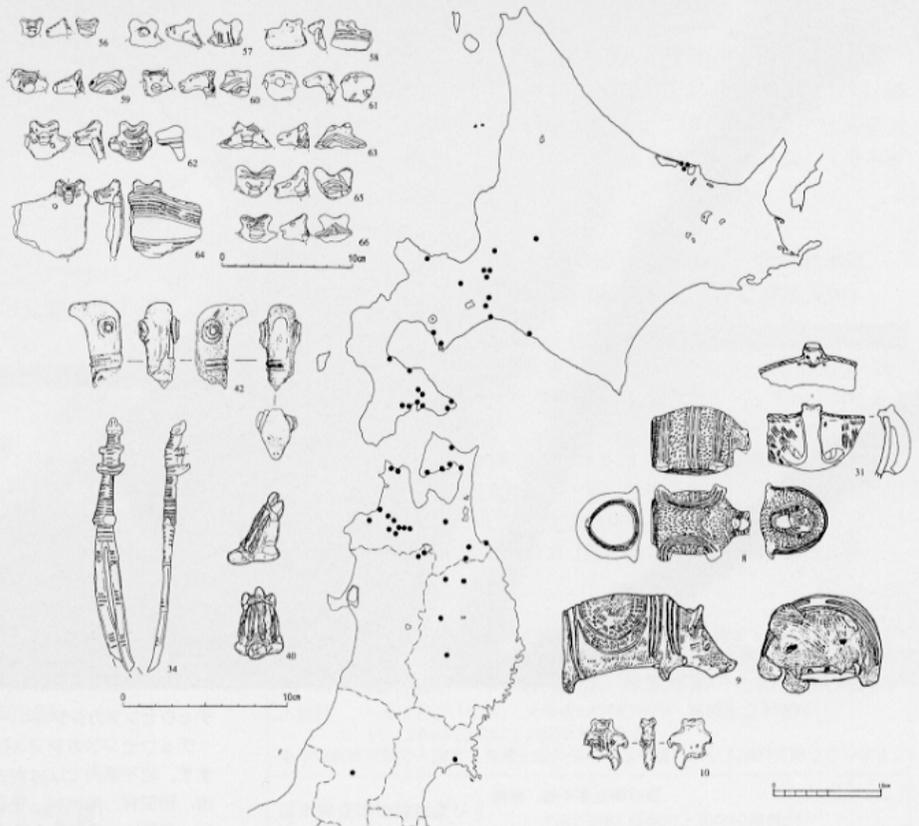
一方、北海道側でも、それにやや遅れて、中央部を中心として用いられていた後北式土器に伴う文化(以下、後北文化と表記)が全道に広がっていきます。それは、後北

C₁式土器の時期から劇的に進行し、それに続く後北C₂-D式土器は、ほぼ全道に拡大します。こうして、東北北半とともに共通文化圏を構成してきた道南西部でも、地域的特色が失われることとなります。

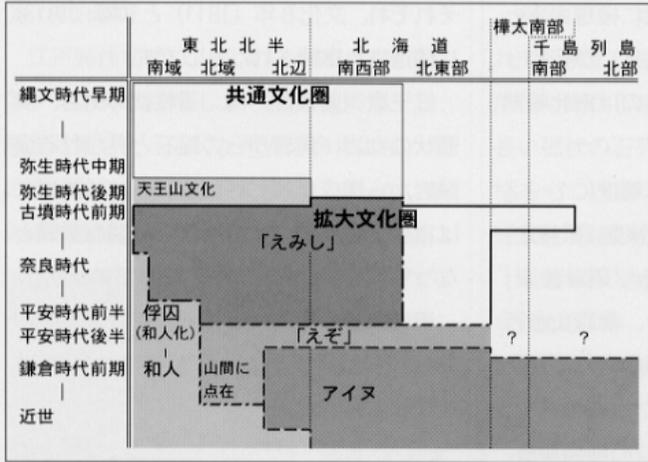
その結果、共通文化圏は、弥生時代後期には解体したと考えられます。それ以前、東北北半や道南西部にみられたクマへの共通の祭祀に伴うとみられるクマの意匠をもつ造形(クマ意匠)も消滅します。こうしたことから、天王山文化や後北文化には、本来、東北地方と北海道とにみられた、いくつかの地域的特色をもつまとまりを、一つの大きな文化圏に再編成するような性格がひそんでいたように思えます。

3 「拡大文化圏」成立の意味

後北文化は、全道を一つの文化圏にまとめるとともに、樺太(サハリン)南部や千



「クマ意匠」出土遺跡 [縄文時代後期～弥生時代(北海道は続縄文時代)中期]
遺物図版左は北海道(佐藤智雄集成)、右は岩手県(日下和寿集成) [ともに東北学院大学民俗学OB会編『東北民俗学研究』第6号より抜粋]



古代「えみし」をめぐる系統図

島列島南部、東北北半など広域に展開し、あたかも、北海道を中心とする南北地域をより大きな文化圏（以下、**拡大文化圏**と表記）にまとめるかのように。東北北半と北海道とは、9世紀頃には地域差が大きくなりますが、後北C₂-D式土器が広まる時期から8世紀代を通じて、ほぼ相通じる文化を保持しています。古代、東北北半から道南西部にかけて「えみし」が住んでいましたから、**拡大文化圏**南半在地の人々の主体が「えみし」だったことは明らかです。

歴史書によると、「えみし」のことは、古代の日本語とは大きく異なっていたとされ、東北北半には、アイヌ語に由来するとされる地名が比較的多くみられます。また、「えみし」が住んだ**拡大文化圏**南半は、かつての**共通文化圏**に重なり、津軽海峡をはさむ文化の共通性もまた、**共通文化圏**の時代にみられたものです。筆者は、東北北半と道南西部とが、**共通文化圏**の時代以降、一時的な断絶はあっても、**拡大文化圏**の時代を通じて、相通じる文化や価値観を保持してきており、その背景には、互に通じ合うアイヌ語系のことばの共有があったと考えています。その意味では、古代「えみし」の系統は、その起源を**共通文化圏**にたどることができるといえるでしょう。

また、平安時代半ば（10世紀後半）以降、「えみし」社会は、日本化した倭寇社会と

在地的な「えぞ」社会とに分化します。そして、平安時代末～鎌倉時代前期（およそ12～13世紀）、「えぞ」社会のうち、北海道から東北北辺にわたる地域にはアイヌ文化が成立します。やがて、北海道的アイヌは、樺太南部や千島列島などに進出し、東北北辺のアイヌは、近世半ば頃まで、盛岡領

の下北半島、弘前領の夏泊・津軽半島などに^ニ状などとして足跡を残しています。

アイヌ文化圏は、東北北半側で北へ縮小、千島列島側で北に拡大する形で、ほぼ**拡大文化圏**と重なることから、**拡大文化圏**の成立は、アイヌ文化誕生に向けた胎動であり、「えみし」の系統の一部は、「えぞ」を経てアイヌの一部へと連なっていると考えます。

4 「えみし」社会の成立（まとめ）

道南西部や東北北半などでは、後北C₂-D式土器が、終末期の弥生土器や古墳時代前期半ば以降の土師器に伴う例が知られています。すると、**拡大文化圏**の成立期は、弥生時代末～古墳時代前期半ば頃ということになります。この時期は、西日本を中心とする倭人社会の政治的統合が進み、3世紀半ばには、埴輪や前方後円墳の造営などに象徴される大和政権が誕生し、やがて東南北半以南の東日本をも巻き込む形で古墳時代を将来する激動期にあたっています。

筆者は、こうした倭人社会の政治的統合

に伴う緊張が、後北文化を求心力として**拡大文化圏**を成立させた主因だと考えます。また、「えみし」は、古代の**拡大文化圏**南半在地の人々の主体ですから、「えみし」社会は、東北北半から道南西部にわたる地域が**拡大文化圏**南半を構成した（後北C₂-D式土器が東北北半など広域に及んだ）段階で成立していることとなります。それは、弥生時代末～古墳時代前期半ばにあたり、それ以降の**拡大文化圏**南半が「えみし」社会ということになります。

次の表は、後北C₂-D式などの北海道に起源する土器と東北北半の弥生土器、あるいは土師器が使用された時期について想定したものです。このことから、東北北半の弥生時代末期と東北南半以南の古墳時代前期前半とは、ある期間並行するものとみられ、「えみし」社会の成立期は、弥生時代末と古墳時代前期半ばとが並行する、4世紀前半を中心とする時期と考えられます。

この研究ノートは、下記に公表した拙稿に基づいて作成しました。1：『弘前大学国史研究』第104号他、2：『岩手県立博物館研究報告』第17号、『北海道考古学』第36輯他、3：『岩手県立博物館研究報告』第14号、『北奥古代文化』第26号他、4：『岩手考古学』第13号他。

年代 AD	統縄文土器	弥生土器	土師器	参考 (畿内) V様式
150				
2世紀後半		天王山式		
200	後北C ₁ 式			
3世紀前半				庄内式 (古段階)
250	初期			
3世紀後半		終末期 弥生土器	前埴釜式段階 (辻編年Ⅰ期)	庄内式 (新段階)
300	後北C ₂ -D式			
4世紀前半	中期		埴釜式古段階 (辻編年Ⅱ期)	布留式 (古段階)
350				
4世紀後半			埴釜式新段階 (辻編年Ⅲ期)	布留式 (中段階)
400				
5世紀前半	北大Ⅰ式		南小泉式	布留式 (新段階)

想定される年代